

地域を変える PTA■社会教育■民生・児童委員■地方議会

障害のある子どもたちの就労体験を通して、地域社会のつながりを育もう。そんな活動が全国に広まりつつある。この夏も、図書館や商店などで、ボランティアの大人が付き添いながら、障害のある子どもたちが業務に打ち込んだ。夏休みが終わった今も週に1度、放課後になると「職場」に通い続ける。子どもが視野を広げ、自分に自信が持てるようになるとともに、地域社会全体で子どもを見守り、育てていくという活動だ。

この活動は「ふれシヨブ」と呼ばれ、岡山県倉敷市で平成15年に始まった。当時、中学校の特別支援学級を担任していた西幸代さんが中心となって、保護者と話し合い、就労体験をさせてくれる企業を探すなどして、定着していった。今では15府県で同様の活動がある。

夏休みが終わったばかりの長野県須坂市。8月下旬の平日の夜、市内の公民館で、「ふれシヨブ」に関わる人たちが夏休み中の活動を報告し合うなどする定例会が開かれた。

特別支援学校に通う小学部6年の男子児童は、図書館が職場だ。夏休み前は、官報をファイルにどしどし込むことが主な仕事だった。夏休みに入ってから、七夕飾りを作るなど新しい仕事にも挑戦した。定例会では、本人が感想を

語るとともに、保護者、学校で担任している教員、就労体験を受け入れている事業所の職員、付き添いのボランティアらも、一言ずつ語る。

この男子児童は、仕事を終えた後に、図書館の本を読むことが大好きだ。母親は「やっぴふれシヨブが楽しくなってきたみたいです。仕事をしたら本を読めることが分かってきたから」と定例会で報告。図書館の館長は、「今までとは全然違う仕事をしてもらったが、うまくやってもらった」。担任の教員は、「学

校を紹介するとして番組がきっかけとなり、須坂市教委の職員らが、倉敷市を訪ね、西さんから詳しい説明を受けた。

須坂市には、障害児の保護者、教員らが組織する「須坂発・特別支援教育を考える会」という組織があった。この組織を中心に、ふれシヨブの準備を進め、翌年11月に3人の子どもが就労体験を始めることになった。

須坂市では、中学校区ごとに、ふれシヨブの推進組織をつくってきた。本年は三つ目の組織ができた。この組織

がある。 **全国組織が発足**

倉敷市の教員と市民が始めた活動が時を経て、行政を巻き込みつつ、全国に広まりつつある。先月4日には、「全国ふれシヨブ連絡協議会」が発足、仙台市内で設立総会を開いた。

子どもが週に1回、就労体験に出向き、半年ごとに別の職場へと移る。この方法が全国へと広まっていった。

倉敷市の西さんは発起人代表、須坂市の田幸さんは発起人の一人だ。各地の組織が連携し、活動を全国に広げていくことを目的に発足した。

須坂市の定例会では、活動報告とともに子どもも大人も一緒に遊べる時間を設けている。身体を使ったゲームの後、2人の子どもが怪談を披露した。みんな楽しんでくれる様子だ。

長野県の阿部守一知事は近く須坂市のふれシヨブを視察する予定だ。田幸さんは、「活動を通して温かい社会をつくってきたい。私たちのノウハウを提供していきます」と話していた。

須坂ふれシヨブ推進会議 090・08773・3648 (田幸さん)

障害児の「就労」で温かい社会づくり

ふれシヨブ 15府県に拡大

校でも飾りを作った。それが仕事に生きているのでは。それぞれ立場から、ふれシヨブについて語り合っていた。

みんなで見守る

市内には、あちこちに「ふれシヨブ」美施中と印刷したのぼり旗が立つ。協力している事業所を示す旗だ。就労体験中の子どもは、市民と触れ合うことも少なくない。子どもたちをみんなで見守り、育てていくという地域社会づくり運動となっている。

須坂市では、22年11月にこの活動が始まった。ふれシヨブ

と定例会を開き、活動を進めている。市が資金の一部を支援している。

就労体験中の子どもに付き添うボランティアは、民生委員の会合などを通して、参加を呼び掛けた。口コミで参加する人も多いという。

長野県内では、須坂市の他に佐久市で本年度に入ってから、同じ活動が始まった。須坂市の活動を中心となって進めてきた小学校教諭の田幸康宏さんが佐久市に足を運び、助言するなどして実現した。長野市、茅野市などでも、ふれシヨブを始めようという動